

言葉に 命が宿る時

NHKアナウンサー

刈屋富士雄

二〇〇一年二月、東京代々木体育館で行われたフィギュアスケートグランプリファイナルの男子シングルは、彗星のごとく現れた十八歳のロシアの天才に大きな注目が集まっていました。後に世界チャンピオンと五輪金メダリストとなり一つの時代を築いたプルシエンコです。この時男子シングルの実況を担当した私は初めてプルシエンコを生で見ました。それまでプルシエンコの演技は映像では何度目にしていましたが、実際に見る彼の演技は映像とはまるで別人。圧倒的なスピード感と卓越した演技力、そして会場全体を引き込むカリスマ性。放送に入り、プルシエンコがものすごい演技を見せている間、「この素晴らしい演技と会場の空気を一言で表現しなければ……」と思いました。そして訪れたフィニッシュの瞬間、私は「ん〜、プルシエンコ！」と発していました。恥ずかしながら言葉が見つからなかったのです。たかが七年ぐらいのフィギュア中継の経験ではこの程度かとすごくショックで落ち込みました。

ところが、放送が終わるとフィギュアスケートのファンから「あの実況は良かった」という声が続々と寄せられました。視聴者の皆さんが勝手に共感してくれました。私としては苦し紛れに名前を呼んだわけですがファンの皆さんも一緒に「さうだよ、プルシエンコさういよね」ってなってしまうわけですね。実況コメントとして成り立っていないにもかかわらず、何かが伝わったのです。

この時はフィギュアファンの共感に救われましたが、もしこの時この瞬間の本質を言い尽くす一言が私の中に湧き起

私は二〇〇四年のアテネオリンピック体操男子団体決勝、体操ニッポン二十八年ぶりの王座奪還の瞬間で「栄光への架け橋だ」という言葉を選択しました。放送の始まる前も、始まってからも、実はこの言葉は頭の中に全くありませんでした。というのも、競技中のいくつもの奇跡が重ならない限り、この言葉を選ぶ状況にはなっていないからです。放送前に私が準備することは、言葉ではなく価値判断の確認です。四位だったらなんの評価するのか、惨敗なのか惜敗なのか、三位だったら復活と言えるのかなど、その評価の確認です。

言葉は、その時の状況に応じてそれまでの取材の蓄積と経験から湧き上がってきますが、その土台となるのが価値判断です。正確な判断をするには、体操ニッポンの歴史と各選手の競技者としての歩みを体に浸み込ませておく必要があります。二十年にわたって世界の王者として君臨した日本、モスクワ五輪ボーイコットによって失った王座を取り戻せないばかりか、アトランタで惨敗しシドニーで惜敗し、アテネに復活をかけてきた経緯を、ただ知識として知るだけではなく、十二年にわたってその道程と一緒に歩いてきた実況者としての自らの経験が判断の指標になります。そして、決勝が始まって次々と起こる奇跡的な展開、金メダル大本命の中国の脱落、最終種目鉄棒でライバルルーマニアとアメリカのエースの失敗など。これらがすべて重なった時、初めてメダル確実の状況が生まれ、私の頭に「復活への架け橋」という言葉が浮か

こつていたら、また違った感動を視聴者と共鳴できたかもしれません。テレビ中継で最も大切なことは「伝える」ということだとこの時実感しました。何を伝えるのか、何が伝わったのかという一点です。スポーツにおいて同じ瞬間は二度とありません。そのたった一度の瞬間に、伝えるべきことを伝えられるかどうか、それが最も大切なことであり最も難しいことでもあります。正解はありませんが、どれだけその本質に迫ろうと努力できるかだと思います。

では伝わるための最大のポイントは何でしょうか。実況においては言葉の選択とタイミングだと思います。どんなに良いこと、正しいことを言っても言葉の選択やタイミングが正しくなければ伝わりません。間違ったことは言っていないのに視聴者の耳に入らず、ただの効果音と化すケースが少なくありません。適切に選ばれた言葉には、命が宿ります。いいタイミングで発せられた言葉にはより強い生命力が加わり、これを受けた人の心でも生き続けるのだと思います。

び上がってきました。

さらに最終演技者富田選手の演技が始まる直前、この時の採点方法で、演技の途中で金メダルか確定することに気づいた時、初めて体の奥底から「栄光」という言葉が湧き上がってきました。その瞬間は、富田選手が演技の途中のコールマンという技が決まった時、つまりこの技が決まれば、その後富田選手が着地で大失敗しても金が決まると確信しました。そこでコールマンが成功した後は、最も伝わる瞬間を狙って「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ」と実況しました。演技の途中で金メダルが決まると気づけたのも、あのタイミングが一番伝わりと確信できたのも十二年の体操の取材・実況の経験と蓄積があったからこそだと思います。もちろんこの言葉に強い生命力が宿っていたのかどうかは分かりませんが、別のより良いコメントが存在したかもしれません、それは私が判断することではなく受け取った人が決めることだと思います。

刈屋富士雄
かりや ふじお

1960年静岡県生まれ。早稲田大学卒業後、83年NHKに入局し、スポーツアナウンサーとして活躍。特にアテネ五輪体操男子団体決勝の「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ」という実況は五輪放送史上に残るコメントと高く評価されている。トリノ五輪では、荒川静香選手のフィギュアスケートアジア史上初の金メダルの瞬間を「トリノのオリンピックの女神は、荒川静香にキスをしました」と実況。バンクーバー五輪ではフィギュア史上最高の戦いといわれた浅田真央とキムヨナの対決を臨場感豊かに伝えた。

